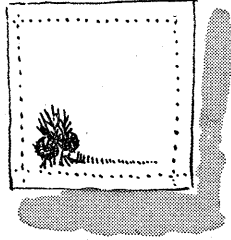


私の保育



平野 信子

春休みの幼稚園はガランとしている。
園全体が眠っているように静かだ。

みんなで追いかけてほしいなサッカーボールは、つるつるにすりへってしまっている。かわいがられ、いつも病気でベッドに寝かされていた赤ちゃん熊は、うす汚れた熊に。

物がみんな変わってしまう。子どもたちが輝きながらジャンプして行ってしまうと何もかもが生彩を失い、はりきっていた私までも少しくたびれた大人に戻ってしまった。

私が保育者として生活を始めた年に生まれた子どもが、この四月に小学校に入学した。この六年間の急速な成長、その間に、私はどれだけ成長しただろうか。

常に湧き出てくる疑問、六年間の経験による強引さ、新な目で保育を見直すことのむずかしさ、保育が終わり、ひとりになった時の迷い、悩みが大きくふくらんでくる。

この機会に一年間に強く感じたことを考え直してみたいと思う。

☆ ☆ ☆ ☆

子どもがひとつの遊びをじっくりと考えながら進める姿を見て保育者は、集中力がある、と考え安心する。が、反

面、同じ活動が毎日続くとこんなことばかりしていいのだからかと不安にもなってくる。

五歳児になり、子どもたちがいちばんよく遊んだのは、おうちごっこ（基地ごっこ）である。女兒も男児も二―三人の気の合う仲間と一緒に家を作っている。テレビのうしろ、ピアノと棚に囲まれた場所、材料棚の横など、四角い部屋の中で見つけることができるすみを全部使っている。

その家で絵をかいいたり、あき箱で何かを作ったり、絵本を読んだりの生活が四―五日間は続く。私の眼には毎日似た遊びをくり返しているようにうつり、『外で力いっぱい走らせいな』と思う。

「ねえ、外に行つてワニごっこ（鬼あそびの一種）をしときましようか」

「いやだよ、ぼくたち遊んでいるよ」

「ずっとしているんだもの、少し外へ行って来ましようよ」やつと外へ出してしばらく遊び、部屋にはいるとまたおうちごっこを始める。

このように長く続く遊びには、たとえ大人には無意味に見えても、子どもにとっては大切なものがひそんでいるのかもしれない。保育者がおうちごっこばかりしていること

を否定的に眺めていても、遊びはよい方向にはいかないので、徹底的におうちごっこをさせることにした。

水道屋さんからもらった蛇口と木箱とで作った流し台。みかん箱をふたつ使って作ったミニ冷蔵庫。子ども二―三人に遊ぶとアイデアが次々浮かび、材料を用意するとつぎつぎに道具ができていく。のこぎりの使い方も慣れ、冷蔵庫の棚も少し斜めについているが丈夫についている。

ままごとコーナーを囲む壁は牛乳のあき箱をボンドとガムテープで積み上げ、屋根にした青い布には、交替で縫った白糸のくねった道がついている。どれも力を合わせ一生懸命に作ったものばかりだ。何よりもおもしろいと思つたのは、人の出入りが多くなったことである。ホールの大積木

で家を作っていると、『お水を飲ませてね』とやってくる子ども。『どうして水が出ないんだよ。つまらないの……』

貸してもらおうよ』とくる子ども。子どもたちだけでなく他の保育者もアイデアや材料を出してくれ、また併設されている小学校の主事さんも板に丸い穴を開けるのを手伝ってくれた。が、みんなで作った道具、そして家を使つてのおうちごっこは長く続かなかつた。しばらくすると、またへやのすみや積木の家に道具を運びこみ使っている。

積木の家は、ほとんど毎日作られた。四方の壁を作り、小さな窓と狭い入口を開ける。

屋根は板積木を渡すので、中は暗く、狭い所に何人もはいっている。時々私も入れてもらうがお客さんとして扱われてしまう。

子どもたちがどんな気持ちで家の中にはいつているのか知りたいと思い、「留守」になった家にひとりではいつてみた。首をすくめ、足を曲げないとすわることもできないせまさ。そして暗い中にいると、自分自身の息使いが聞こえてきそうになる。すき間ほどの小さな窓からのぞくと外がいつもと違った世界に見えてくる。他の人は自分のことに気づかず、自分は人のことを見ている。……思わずクスクス笑いたくなるくらいおもしろい。外に出ると内から見ていた景色が急に平たくなってしまった。

おうちごっこは、日常の生活空間にひとつの囲まれた別の世界を作ることなのかと思われる。

☆ ☆ ☆

おうちごっこをしている子どもを鬼遊びに誘うとき、これまで自分から遊びたくなるまで待ったり、働きかけたりにしていたが、ことしは、われながら驚くほど強引に誘っ

ている。このように生の感情をぶつけるようになったのはN男の役割が大きい。

N男はいつもひとりで何かを作りながら、友だちの遊びをはいりたそうにしながら見ていた。自分から働きかけて入れてもらうことはできず、時々誘われるとうれしそうにはいつていった。

保育者としては、自分自身の力で遊びにはいれるようになってほしいので見守っていたのだが、つい「入れてもらったら」と声をかけてしまう。するとはにかんだままスーッと退いてしまう。

こんなやりとりが何回もあったある日、やはり、スーッと引っこんでしまいそうなN男に思わず、「Nちゃん、はいりたいのにどうして行かないの。誘ってくれるのを待っていないでがんばっていらっしやい」とお尻を叩くように押し出してやった。

それ以来、N男は何かがふっきれたように友だちの中にいつていくようになった。

保育者の心がまえとして子どもを受容し、子どもが自発的に活動できるようにと考えているが、時には意識して否定的感情をぶつけることも必要なのではないかと思う。

自分の感情を素直に出すことは、本当にむずかしい。

☆ ☆ ☆ ☆

東京のまん中、自然に恵まれず、コンクリートに囲まれた中に私の勤める幼稚園はある。そこに去年、小さな芝生の庭ができた。

これまでは砂場ではだしに出来ない子どもも、きれいな遊びしかできなかった子どもも、みんな芝生の上に行こうとしてしまえばかり、強引にはだしにさせてしまった。うれしそうにひっくりかえる子ども、

「ひゃあ、足が冷たい」と声をあげる子ども、そっと足を縮める子ども。

芝生は、いろいろな気持ちの足をやわらかく受けとめてくれた。

けがの心配をしないで思いっきりできる、すもう、かけっこ。

砂をかけ、ものあたりまで埋めてしまう子ども。遊びがしたいに違っていった。

はだしを気持ち悪がっていた子どもが、登園するとすぐ、くつ下を脱ぎ、室内をベタベタ走りまわるようになっていった。

夏のある日には、水まき用スプリンクラーを回し、その下をくぐりぬける遊びが始まった。キャッキョッと走りぬけ、あるいは、水しぶきに体当たりをしていった。顔も洋服もぬらし喜々としている子どもの顔。ぬれた洋服を自然乾燥するためにコンクリートに寝ころんでいる子どもの顔。

そこには、「発散」「解放感」ということばでは言い足りない何かがあると思う。

芝生の庭ができる以前は、砂場、ぶらんこ、すべり台のある庭、屋上と三方に遊び場がわかれていたので、子どもたちは目的をきちんと持って遊び場へ行っていた。が庭ひとつになると、いろいろな遊びが集まるようになった。また小さな庭なので互いの遊びがよく見え、おもしろい遊びに子どもたちがはいるようになった。クラスの意識でなく、おもしろい遊びによる子どもたちのうずまきができた。

☆ ☆ ☆ ☆

保育者として、子どもたちの成長にどんな手助けができるかと考えたとき、とてもむずかしく何もできないように思われる。が、私にできることを考えたとき、全力を出して子どもたちとぶつかりあい、はずんだ生活をしていきたいと考える。

(千代田区立富士見幼稚園)